

**Q 東京で、何つくる？**

「つくる」を実験するスクールプログラム

**東京**



**プロジェクト**

多様な問い合わせから、スタディが展開中→

**スタディ**

*tarl*

TOKYO ART  
RESEARCH LAB



刻一刻と変わっていく社会の状況。

何が起こるか分からず、予測することも難しい。

そんないまを生きる私たちには

既存の手法や価値にとらわれず、新しい形式や実験をとおして、

いまだ見ぬ何かを生み出そうとする思考力や実践力、  
つまり「つくる」力が必要だ。



## 東京プロジェクトスタディ

「東京プロジェクトスタディ」は、「東京で何かを「つくる」としたら」という投げかけのもと、「ナビゲーター」と、公募で集まった「メンバー」がチームとなり、リサーチや実験を繰り返しながら新たなプロジェクトの核をつくる試みです。ナビゲーターは、アーティストやディレクターなどのつくり手。演劇、美術、パフォーマンス、音楽、映像など、表現方法や「つくる」過程もさまざまです。それぞれの問題意識や興味から、チームでスタディ(勉強、調査、研究、試作)に取り組みます。

1. 何を、どのように、なぜつくるのかといった、「つくる前」の時間から、メンバーとともに思考と実験を重ねます
2. スタディの「進め方」はチームで一緒に考えていきます
3. 答えを出すことや形にすることではなく、過程で生まれる「問い合わせ」や「もやもや」を大事にします
4. 新しいことを生み出す「身体感覚」を身につけます

### 音楽と公共を考える



Music For A Space  
—東京から聴こえてくる音楽  
(2018年度)

音と人との新しい関係性を探るプロジェクトを展開してきた清宮陵一がナビゲーター。音楽のさまざまなとらえ方、公共空間における音楽の可能性を深めていった。

### 表現を試みる



自分の足で「あるく みる きく」ために  
—知ること、表現すること、伝えること、  
そしてまた知ること(=生きること) (2018年度)

アーティスト3名の表現の現場に触れながら、実験と思考を重ね、参加者自らが制作と表現を行った。ナビゲーターは、NPO法人アートフル・アクションの宮下美穂。

### 話を聞く



部屋しかないところからラボを建てる  
—知らないだれかの話を聞きに行く、チームで思考する  
(2018年度)

NOOKがナビゲーターを務め、「ひとの話を聞く」方法に重点を置き、「いま」「東京」でメンバーの関心を持ちより、調べ、共有・可視化するラボの立ち上げを試みた。

### ことばにする



「東京でつくる」ということ  
—前提を問う、ことばにする、自分の芯に気づく(2018年度)  
—わたしとアートプロジェクトとの距離を記述する(2019年度)

### 'Home'を探る



'Home' in Tokyo  
—確かさと不確かさの間で生き抜く  
(2019年度)

映像エスノグラファーの大橋香奈がナビゲーター。流動性が高く、多様な背景の人が暮らす東京で、「Home」のありようを探った。

### パフォーマンスをつくる



2027年ミュンスターへの旅  
(2018, 2019年度)

「東京」や「公共」、まちなかの「彫刻」について、パフォーマンスの視点から思考と実験を重ねた。ナビゲーターは、居間 theater(パフォーマンスプロジェクト)と佐藤慎也(プロジェクト構造設計)。

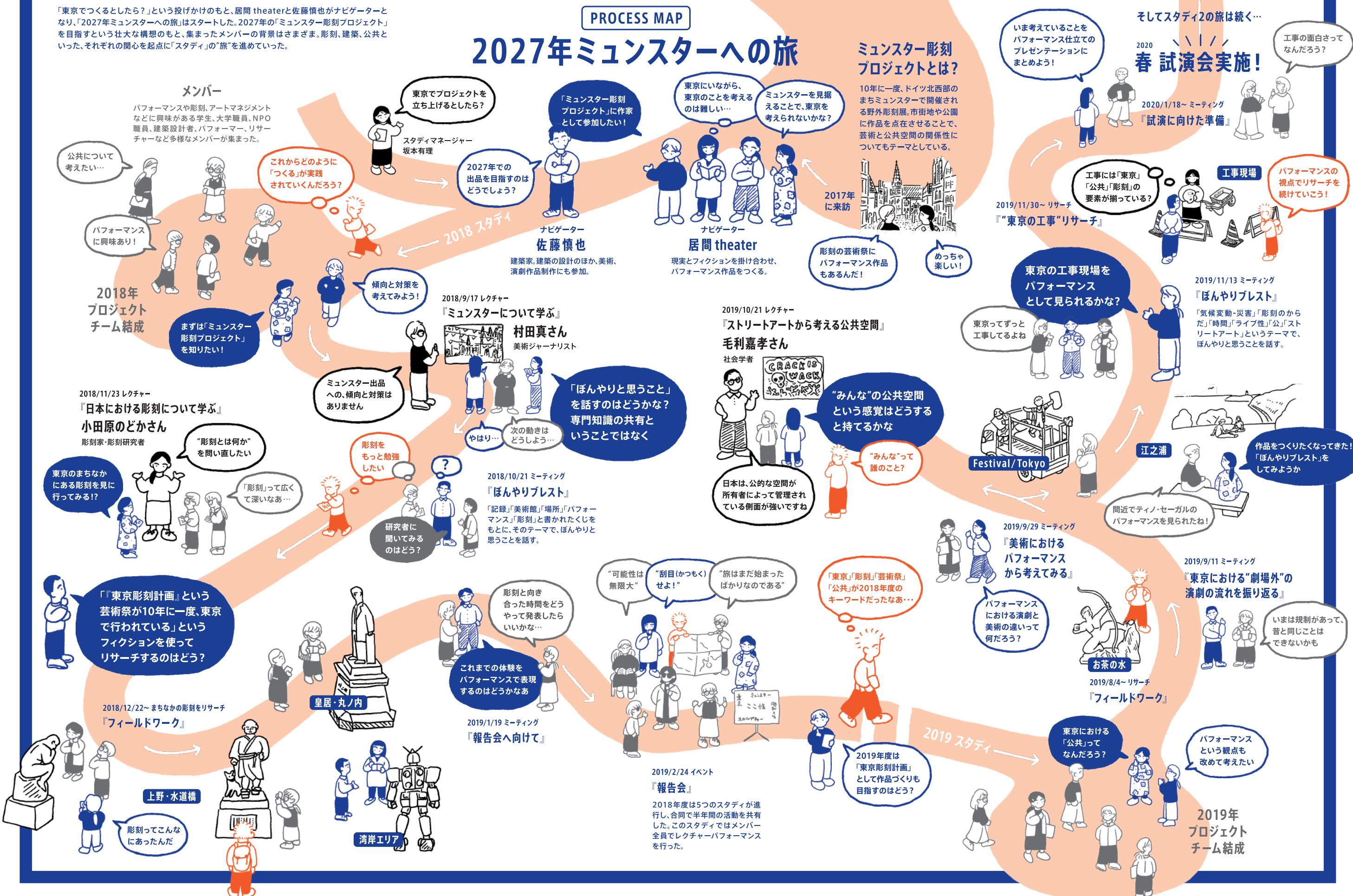


### 各スタディについて詳しくはこちら

<https://www.tokyoprojectstudy.jp>

## パフォーマンスをつくる！

2018年度からさまざまなテーマで展開してきた「東京プロジェクトスタディ」。ナビゲーターが設定したテーマから、「つくる」はどのように立ち上がっていくのだろう? スタディ「2027年ミュンスターへの旅」を事例に、「つくる」ための試行錯誤のプロセスをたどってみよう。



# 東京で「つくる」とは？

これまでの東京プロジェクトスタディでナビゲーターを務めた2人に、東京で「つくる」ことの可能性を聞いた。回答は、音楽レーベルやアートプロジェクトを主宰する清宮陵一と、アーティストや研究者などで形成された記録をつくるチーム・NOOK（のおく）の瀬尾夏美。

東京プロジェクトスタディ（2018年度）

「Music For A Space」

ナビゲーター  
**清宮陵一**

[VINYL SOYUZ LLC代表、  
NPO法人トッピングイースト理事長]

東京プロジェクトスタディ（2018年度）

「部屋しかないところから ラボを建てる」

ナビゲーター  
**瀬尾夏美**

[アーティスト、一般社団法人NOOK]

**Q いま、東京にどのような印象を持っていますか？**

清宮：東京生まれ、東京育ちの自分としては、東京は特別なものではなくて「そこに在る」という感覚です。音楽を生業としてビジネスとしてだけ捉えていたころ、2000年くらいまでは情報発信や流通の拠点は東京で、物理的に居なければならぬ場所でした。いまはインターネットが発達して、全くそうではないですね。一方、2010年代になって関わるようになったアートプロジェクトは、人がいてこそ場が立ち上ります。だから、音楽をテーマにしたアートプロジェクトが、これからも東京で展開していく可能性はまだあるはずだと思っています。

瀬尾：聞かれるべきことばがたくさんあるはずの場所。あらゆる種類のコミュニティ、体験、思想、暮らし方……を選ぶ人たちがある一定数ずつ集まれるからこそ、領域を横断していくことの難しさがある。だからこそ、語れない、語らないことばが個々人に埋まっている感じがします。それは現在の東京で生き抜くための大切な技術だと思うのですが、もう少し内輪以外の人たちとも、ことばを交わすこと、話を聞きあうことができると、出来事や課題や関心領域がつながったり、もしくは分かり合えなさを理解しあえたりして、よりリラックスして安心できる場になるんじゃないかなと思ったりします。

**Q 東京で「つくる」ことにどのような可能性を感じますか？**

清宮：現在、2020年に隅田川沿いで開催する音楽とアートのフェスティバル企画を進めています。そのなかで感じるのは、公共空間の規制の厳しさです。市民の安全性が最優先される公共空間にとって規制は大事ですが、そこに萎縮せずに地域の人たちが自主的にまちに関われる場を立ち上げまくりたいと考えています。東京で「つくる」ことに難しさを感じる場面は多いですが、これから新しいことを生み出す人たちにバトンを渡したいので、可能性を信じて進んでいくしかないと思っています。

瀬尾：さまざまな領域を行き来し、「聞く・語る」回路をつくることから、何かが動く予感があります。ちょっと乱暴ではあるけれど、それがきっとアートの仕事でもあると思っています。スタディでは東京大空襲の体験にまつわる語りに出会いに行きました。東京を歩き、話を聞かせてもらいながら、自分の考えをことばにしていくことで、足元にある東京が多層的な場に変容していく。そこから、ともに生きる他者が持つ物語や日々の暮らしの機微への想像力を持つことができる。「つくる」という技術は誰もが少なからず持っているものですが、こういった準備運動をしてから「つくる」ことで、より跳躍が可能になる気がします。

**Q 東京プロジェクトスタディにはどのような魅力がありましたか？**

清宮：音楽家や音楽関係者から話を聞くことをベースに、そこにいろいろな視点を持った参加者がいることで、普段からよく会話をしている音楽家とも、これまで聞いたことのなかった生い立ちや音楽の話をじっくり聞くことができたのは新鮮でした。なかでも、エンジニアのzAkさんの「音楽は魔法だ」ということばが印象的でした。音楽が人を惹きつける力は、その人の生きざまそのものが反映されているからだ、ということを改めて感じました。

瀬尾：これから何かをするときの協働者や友だちに出会えた人も多くいるんじゃないかな、ということです。日常的に関わるコミュニティというよりも、ゆるいネットワークのなかに私もある人たちもいる、という実感の方が、誰も彼もが忙しい現在において必要なものなのではと感じています。わたしもはやく東京でいろいろつくりたいです。そのときには、皆さんどうぞよろしくお願いします！

きよみや・りょういち

VINYL SOYUZ LLC 代表／NPO法人トッピングイースト理事長。坂本龍一氏のレーベル「commons」に参画後、音楽プロダクション「VINYL SOYUZ LLC」を設立し、現在は青柳拓次（LITTLE CREATURES）、和田永、蓮沼執太、相対性理論といった音楽家らと協業する傍ら、特別なヴェニューや公共空間でのパフォーマンスを多数プロデュース。東京をベースに音楽がまちなかでできることを拡張すべく「ほくさい音楽博」「エレクトロニコス・ファンタスティコス！」等を展開。

せお・なつみ

1988年東京都生まれ。宮城県在住。アーティスト。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。土地の人びとのことばと風景の記録を考えながら、絵や文章をつくっている。岩手県陸前高田市を拠点とした制作を経て、2015年、仙台市で一般社団法人NOOKを立ち上げる。現在は“語れなさ”をテーマに各地を旅し、物語を書いている。ダンサーや映像作家との共同制作や、記録や福祉に関わる公共施設やNPOなどとの協働による展覧会やワークショップの企画も行う。著書に『あわいゆくころ—陸前高田、震災後を生きる』（晶文社、2019年）がある。

# 東京プロジェクトスタディにアクセス!

Q 東京プロジェクトスタディに参加してみたい!

まずは、ウェブサイトへアクセス!

東京プロジェクトスタディ(以下、スタディ)では、ナビゲーターがテーマを設定し、公募で集まった参加者とチームになって進めます。どういったつくり手のナビゲーターがいるのか、どんなテーマのスタディが動いているのか、最新情報や募集情報については、Tokyo Art Research LabウェブサイトやSNSにて案内しますので、ぜひチェックしてください。



<https://tarl.jp>



ウェブサイト

Twitter

Facebook

Q これまでの東京プロジェクトスタディについて、もっと知りたい!

東京プロジェクトスタディのアーカイブサイトへ!

アーカイブサイトでは、これまで展開してきたスタディが、どのように「何かをつくる手前の時間」を過ごしたのかを記録しています。活動のプロセスや、そこで生まれたことばや手法は、いつか誰かの「つくる」を考えるヒントになるかもしれません。わからなさ、複雑さ、そしてときに遠回りすることを大事にしながら、予定調和に陥らない「つくる時間」に身を置く実験を、ぜひ追体験してみてください。



<https://www.tokyoprojectstudy.jp>



アーカイブサイト

「東京プロジェクトスタディ」は、Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」の一環として行っています。

**Tokyo Art Research Lab (TARL) とは?**

TARLは、アートプロジェクトに関わっている、またはこれから関わる人のためのラボです。スクールプログラム「思考と技術と対話の学校」と「研究・開発」の2軸で、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。「東京プロジェクトスタディ」以外にも、多彩なゲストとともに、さまざまなプログラムを随時開講。これまでの活動や成果物については、活動拠点であるROOM302やウェブサイトにてご覧いただけます。



さまざまなレクチャーやディスカッション、イベントを随時開催しています。  
場所: ROOM302 (3331 Arts Chiyoda 3F [東京都千代田区外神田6-11-14-302])



成果物はTARLウェブサイトやROOM302で  
ご覧いただけます。

主催／問い合わせ

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京  
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階  
Tel: 03-6256-8435 (平日10:00-18:00)  
E-mail: tarl@arts council-tokyo.jp

文化でつながる。未来とつながる。  
**Tokyo Tokyo**  
FESTIVAL

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京  
編集 佐藤恵美、上地里佳+坂本有理 [アーツカウンシル東京]  
デザイン 阿部航太  
イラストレーション 阿部龍一  
企画・制作 NPO法人 Art Bridge Institute